

# 洋楽を活用したリスニング活動

小林 敏彦

## ABSTRACT

英語の楽曲(以下「洋楽」)を使用した授業が近年、特に1990年代に高校のカリキュラムにオーラルコミュニケーションが導入されて以来、日本の中学、高校、大学のレベルを問わず普及を見せている。大学一年生を対象とした調査<sup>1</sup>でも、半数以上の学生が大学入学以前に、洋楽を使用した授業を受けたことがあると回答している。洋楽は、正式な英語学習が始まる以前から日本語母語話者<sup>2</sup>が幼児期からもっとも頻繁に接する英語媒体であるにも係わらず、一部の熱心な教師以外には、学習の対象としては認知されてこなかった。洋楽の使用した活動は、単に授業を活性化し、英語学習へ動機づけに役立つだけでなく、音声認識能力と発音を高める本格的な教授法として認知されるべきである。そして、定期試験等においても音楽の実技試験のようなものを実施し、評価法を大胆に柔軟化し多様な基準を設けることで、従来の評価法では、はじかれていた英語学習者を救う道も開けるだろう。本稿では、筆者が1990年秋以来12年間、日米の大学や英語学校で実践し豊富なフィードバックを基に改良を繰り返してきた、聞き取りから発声までを含む洋楽を活用した授業活動の手法を紹介する。

## 1 : INTRODUCTION

洋楽は、日本人英語学習者にとってもっとも身近に存在する英語媒体であり、洋画と同様に我々の魂に直接訴えかけてくる。(Ferrasci, Murray & Someya, 1999) その係わりは特に若い世代に顕著である。Kanzaki(1987, p. 3)は若者と洋楽の係わりについて以下のように述べている。

音楽は近頃の若い人にとって、生活の一部になっている、といって過言ではないだろう。乗り物に乗れば、すぐバックからカセットを取り出しイヤホーンを耳に差し込んで音楽を聴き始める。

1980年代は、洋楽の再生には、カセットプレーヤーが主流だったが、今日ではCDやMDが主流である。筆者自身も中学校入学に入学し英語を習い始める前から洋楽に親しんできたが、当時は、あくまでも音楽として聞いているのであって歌詞に注意を払っていた記憶はない。

Kanzaki(1987, p. 3)は、この点について以下のように述べている：

学生たちに聴いている歌の内容を尋ねると、ほとんどの者がわからないと答える。あれだけ多くの時間とエネルギー、それにお金を費やしているのに、意味もよくわからない歌をただ空ろに聴いているのは、いかにもったいない話ではないか。

まったく同感である。1日1分も英語のテキストのテープやニュースを聞かない学生も、洋楽なら1日10分は聞いている学生は多いだろう。洋楽鑑賞は、教師の指示や強制なしで行われる自発的な英語のインプットであり、内発的な動機づけによる行為である。この習慣を教室外のインプット供給源として活用しない手はない。洋楽を授業に取り入れ、その楽しさを体験させ、英語が身近な存在であるということを再認識させてあげることで、英語学習の意欲が高まることが期待される。Kanzaki(1987, p. 3)は、この点について以下のように主張している：

英語の理解が深まれば、好きな音楽の楽しさも倍増する。そして音楽の楽しさが増えれば更に英語の勉強に力が入るというものである。

また、洋楽の持つ教材としての可能性を Tsuda(2001, p. 1)は、以下のように教材としての洋楽について述べている：

映画も、歌も、ともにテーマを持ち、背後にある文化や時代を反映しています。それぞれが与える感動、影響力は言うまでもありませんが、英語学習にとっても多くの可能性を秘めた教材だと言えるでしょう。

もっとも身近なはずの洋楽であるが、歌詞の聞き取りは、あらゆるリスニング活動の中で、実はもっとも聞き取りが難しい英語媒体である。かなり英

語の成績が良い学習者が知っているはずの簡単な英語の歌詞を聞き取れない時に、自己喪失や自己嫌悪に陥ってしまっている英語学習者が少なくない。(Kumai & Timson, 1999) また、英語圏の滞在経験が豊富な英語上級者(実用英語検定1級、TOEIC 860<sup>3</sup>点以上の取得者)にとっても、歌詞の聞き取りは、その音声認識の困難さにおいて、洋画のさらに上位に位置づけられ、英語学習の最終到達レベルと位置づけてもよいだろう。

## 2：洋楽を使用する7つの理由

### 2-1. もっとも英語学習者に馴染む深い英語媒体

小学校や中学校で英語学習を開始するはるか以前から、多くの日本語母語話者が洋楽を耳にしている事実は見逃せない。洋楽は、一般の日本語母語話者が日本国内で最初に接する英語媒体であると同時に、意識的または無意識のうちに接している異文化である。Graham (1992, p. 43) は、この点を以下のように指摘している：

Music opens doors, giving language students a greater awareness of the new culture to which they are being exposed and a sense of feeling more at home with the sounds and rhythms of the language they are learning.

かなり普及しているはずの洋楽であるが、日本語母話者のほとんどは、歌詞を聞き取れず理解していないか、または関心がない。それは、洋楽の聞き取りの難解であることよりも、この英語との接点をもっとも早く、しかもその後頻繁で身近な存在である洋楽という媒体を英語教育界が娯楽媒体として扱い、教材として認知してこなかったためではないだろうか。そのため、洋楽の歌詞が学校で習う同じ英語であるという意識が喪失し、本来メッセージを伝えている歌詞がただの音響効果の一部となり、ギターやドラムと同じ楽器音としてしか認識されてこなかったのである。確かに、中学、高校の英語テキストには、巻末に英語の歌詞が載せてあるものが多いが、それはあく

までも付録扱いであり、本格的な授業活動として使われることを期待されてはいるようには思われない。この英語教育界の洋楽に対する姿勢について、Griffiee(1986, p. 4)は、以下のように述べている：

Songs and music are a perennial feature of the TESOL field. Seldom, however, does interest in them, translate into a range or a bandwagon.

学習者のもっとも身近にあつて、もっとも親しみの深い英語学習教材を宝の持ち腐れにしてきたと言える。実際に英語がどのような形態で我々の生活の中に存在しているかという、根本的な事実を目を背け、視覚中心の英語学習を続けるならば、その成果は英語の実情に合わないばかりか、英語はアカデミックな科目としてしか認識されなくなり、外発的動機づけがなくなる時点で英語学習は放棄される。この身近でありながら、授業で軽視され、聞き取りがもっとも困難な洋楽をある程度聞き取れるように指導し、教室外で学習の成果が実感できるような環境を作り上げることは、学校で筆記体を教えることと同様にごく自然なことではないだろうか。

洋楽は、英語学習を放棄した者にも、スムーズに英語の学習が進んでいる進学組にとっても、英語の生態系の一部として、大きな存在であり、実際の英語使用の場においても、受信技能においては鑑賞の形で存在し、発信技能においては歌やカラオケという形で実在する。米国に留学して、英文和訳をする機会はまったくないかも知れないが、英語の歌詞を口ずさみ、大都市には必ずあるカラオケ・バーで親交を深める機会はある。しかし、それは従来英語教育界ではまったく想定していなかった学習者の言語使用域なのである。現実の英語の使用域を正確に把握せずに教養主義に偏重してきた英語教育界、とりわけ無関心の現場の教師による不作為(inaction)があつたことは自明である。

## 2-2. 授業のレディネスと授業の雰囲気の高活性化

大学の1講義90分間に同じ授業形態や活動が延々と続けば、学生の注意力は散漫になり、苦痛が生じる。洋楽の中でも特に映画音楽を活用している Maekawa & Dermer (1999, p. 1) は、その点について以下のように回顧している：

私たち自身90分という長丁場の講義で、リーディング用教材のみによって学生の関心を惹きつけ続けることの難しさを感じています。私たちが採って方法は、途中の英米の文化と言葉から離れることなく、学生の興味をリフレッシュする材料を知的な雑談として供給することでした。そのためには映画音楽は優れた教材でした。

洋楽の数ある効用の中でも、もっとも顕著なのは、洋楽に学習者を楽しませる要素があるという点である。(Graham, 1992) それは成果が観察されるまで時間を要する音声的な恩恵よりも、学習者自身にも容易に認識できるものである。よい雰囲気が維持されている状態は、授業の成功のバロメーターであり、それは学習者の表情や態度に素直に表出する。対照的に、学習者と対立し、加虐的な衝動が教師側に芽生える事態はだけは絶対に回避すべきである。

授業開始直前まで日本語の世界にどっぷり浸かっていた学習者の頭に英語がすんなり入るようになるには、授業開始時に洋楽を聞かせて、リラックスさせると効果的である。大学の1講義目や3講義目の睡魔の時間には特に効き目がある。すべての英語授業が魚市場のせりのように活気づく必要はないが、授業中の学生の居眠りを放置し続けることは、語学の授業では論外である。毅然たる態度で教室内の雰囲気を室温と同様に快適に保たなければならない。

## 2-3. もっとも困難な聞き取りの形態

英語の音声認識の難しさは以下のように整理できる。洋楽はあらゆる英語の音のジャンルの中でも、聞き取りの困難さにおいては、最高位に位置する

ことに異存はないだろう。

- 1 : 洋楽の聞き取り
- 2 : 洋画の聞き取り
- 3 : ニュースの聞き取り
- 4 : 講義の聞き取り
- 5 : 対話での聞き取り

一般に英会話ぐらいでできたいと考える人の目標は5のレベルである。一对一の直接対話では、話し手が聞き手の反応を伺いながら話したり、フォーレナートークにより、語彙や音声レベルでさまざまな調整を行うために、理解可能なインプット (comprehensible input) が確保される。

洋楽の歌詞の聞き取りが困難を極める最大理由は、語彙的特徴よりも音声的特徴によるものである。Kumai (2002, p. 3) は、自らの洋楽を通じたりスニング学習を以下のように回顧する：

英語の歌によく登場する音声変化は実際の日常会話にもよく出てくるので、ネイティブ・スピーカーとの会話で相手の言っていることを理解するのにとても役に立ちました。

このように、洋楽における音声を認識する能力 (discrimination skill) は、一般の会話の聞き取りにも関連が伺える。Buck & Axtell (1986, p. 4) は、音楽とコミュニケーション能力の発達の関係について以下のように説明している：

The ability to discriminate fine differences in musical tones is a skill necessary for any promising students of voice or musical instruments. Similarly, the development of listening skills necessary to discriminate between new sounds in a foreign language is vital to the language learners' progress toward communicative competence.

彼らは、この主張を前提に、沖縄県の高校で音楽を専攻する生徒12名と専攻していない生徒8名を被験者とし、ミニマルペアなどの音声の聞き分けや

多義選択式のディクテーションを行った。その結果、被験者数が実証性を十分に証明する足りなかったことを認めつつ、音楽専攻の生徒の方が英語の聞き取りが優れていることを確認した。音楽性と英語の音声聞き取りの間に強い関連があることを伺わせる実証研究である。

洋楽の発声は、日常の対話や独話と共通点は多いものの、通常観察されない音声変化が現れることを忘れてはならない。たいてい曲には、母音の長音化、語尾の子音のリダクションなどが、日常の会話よりも顕著な形で現れ、発音の特徴、イントネーション、ピッチ、リズムも曲ごとに異なる特徴を有している。さらに、演奏が伴い聞き取りが一層困難になっている。しかし、この聞き取りの難解さを極める洋楽の音声に慣れることで、日常会話の音声変化や聞き取りが容易に感じるようになると考えられる。最高位に位置する洋楽を聞き取れば語彙や語用の要素が大きく影響を及ぼす場合を除いて、音声認識に関する限り、下位のレベルは容易に感じるようになるはずである。リダクションなどの英語の音声変化がもっとも顕在化する洋楽を通じて整理してあげると他の媒体の聞き取りへの応用が効くと考える。

#### 2-4. 調音様式と発音の強化

Brown & Helgesen (1986) は、洋楽の主要な効用 (primary advantage) は、語彙と発音の発達だと述べている。Miller (2000, p. 1) は、洋楽を使用した発音指導の効用について、“Songs are pedagogically sound and motivating.” “There is a powerful connection between songs and speech.” “Some songs encourage movement needed to internalize the rhythm patterns of a new language.” の3点を挙げている。

音声の認識ができれば自動的に発音も上達するとは言い切れない。音声認識は、左脳のウェルニッケ領域<sup>4</sup>で行われるが、正しい調音ができるようになるには、その先のブローカー領域<sup>5</sup>、運動制御領域<sup>6</sup>、発声器官を実際に稼働させる必要がある。(図を参照)

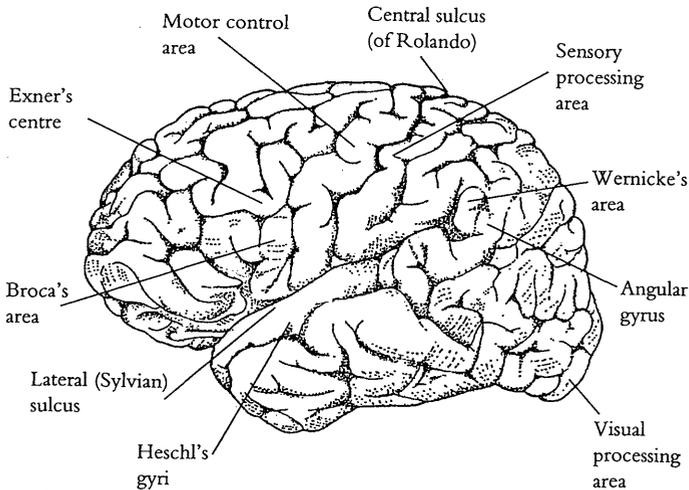
発音の強化のためには、実際に発話器官を使って発音することが大切であ

る。筆者の授業では、音声認識のための語彙選択や空欄穴埋めのタスク後に、テープレコーダーで曲を再生したり、DVDのカラオケを大画面に写し出しながらクラス全体で合唱している。現在多くの洋楽を活用した大学用テキストが出版されているが、合唱を奨励しているものは皆無である。また、それらのテキストや筆者が扱っている洋楽のほとんどが、音楽ジャンルの中でも聞きやすく、歌いやすいポップスの部類に入る。

## 2-5. 会話フレーズの紹介と内在化

誰でも歌の一節を口ずさむことがあるように、歌詞は記憶の中に留まり、何かの機会に想起されることがある。Brown & Helgensen(1986, p. 8)は、洋楽が長く学習者の記憶に保持される利点を紹介している：

Songs are generally a crystalized form of language; they have specific lyrics that don't change. As such, they can provide interesting formats for grammatical or functional practice. They also



図：脳と言語処理

(Steinberg 著『An Introduction to Psycholinguistics』(p. 182) より抜粋)

seem to be more easily remembered than many other forms of discourse. Witness the large number of students who can remember the lyrics to the Stepehm Foster (or Beatles) tunes they learned in junior high school even though they would be hard-pressed to recall the dialogues they “learned” at the same time.

ただし、洋楽による会話フレーズの紹介は、上記の効用から比較するとあくまでも二次的なものである。特定のフレーズを教えるために選曲するのは、困難であり、ある曲を授業で使用することになって、歌詞中にたまたま使われている表現を紹介するというのが現実のアプローチである。

対照的に、特定のフレーズを教えることを目的に、それに音楽を付ける“jazz chanting”(Graham, 1992)にも注目したい。特定の日常会話のフレーズ、例えば、“I’d rather not say.”などにジャズのリズムを付けて、軽快に、そして時に身体を動かしながら発音する。ラップのように歌いながら覚えさせるのである。リズム、ストレス、イントネーションなどの発話の側面を強化する方法として、特定表現に焦点を絞り、しかも何度も繰り返すので、洋楽を歌うより、表現の内在化が進み、定着しやすい。ただし、有名なアーティストの楽曲を聞いて楽しむ要素に欠ける。

## 2-6. 柔軟な英語力評価法

現行の受験体制や検定試験の枠組みでは、しっかりとした語彙と文法知識を持った英語力が高い評価を受ける。高校、大学受験では書き言葉に偏重しており、実用英語検定などは、文法、語彙、読解、英文和訳、和文英訳、リスニング、英語面接に至るまであらゆる技能を試される。学習者の認知スタイルや思考パターンの違いから、これらの技能間には通常ばらつきがあるが、その方がむしろ自然である。

中学、高校の英語にまったくついて行けなくなってしまった生徒にとっては、卒業までの残る英語の授業は、ただ過ぎるのを待っているだけの非生産的な時間であるばかりか、苦痛であり精神衛生上好ましくない。そんな彼ら

の中にも目を輝かせ洋楽に耳を傾け、カラオケで歌ったり、歌詞を部分的に口ずさむ者はいるはずである。英語は、洋楽という形態を取り、既に若者のサブカルチャーとして浸透している事実をなぜ教育者は無視し続けるのだろうか。洋楽を活用した英語授業を展開している人たちは、英語が不得意な学生に対して英語への関心を高め、動機づけを与えようとしている教育者も多いのである。(Moriguchi & Kimura, 2002)

もちろん、コミュニケーション上、洋楽の聞き取り能力や歌唱力などは本人のニーズや選択しだいであり、不要と考える人が多いのは確かである。しかし、それは事実誤認である。洋楽は英語使用の使用域としてしっかりと認識され、中学、高校の教科書には独立した章を設け、制度的に洋楽を用いて、歌える状態にまで指導することをシラバスに明記すべきである。そして、定期試験等においても音楽の実技試験のように、歌唱力は問わずとも、正しい発音でしっかりと歌う技能が評価対象に入れられてもよいのではないだろうか。このように評価法を大胆に柔軟化し多様な基準を設けることで、従来の評価法では、はじかれていた英語学習者を救う道も開けるだろう。

## 2-7. 生涯の知的資産としての洋楽

筆者は米国で英語を教えていた時期を入れ12年以上洋楽を取り入れているが、卒業後もこの洋楽の部分を思い出に語る卒業生は少なくない。また、日本語の授業では、カラオケを導入し、日本の流行歌や「上を向いて歩こう」などのスタンダードを使ってリスニングと歌唱指導を行ったこともある。The BeatlesのYesterdayぐらいならカラオケで歌える日本語母語話者も多いかも知れないが、30曲の洋楽が歌える人は少ないはずである。カラオケに限らず、スタンダードの曲を選ぶことにより、街角のBGMなどでいずれかの曲を耳にした時に、その授業の様子が鮮明に思い出されるかも知れない。洋楽はインパクトとイフェクトの両方を提供してくれるのである。

アカデミックな英語から空気のごとく身近に存在する洋楽へと視点がシフトした学習者は、英語に対する精神的距離が縮まったと答える。そして、洋楽

に限らず、日本社会に溢れる英語の音を耳にする度に、耳をそばたて内容を把握しようとする習慣が身に付いたとすれば、それは洋楽を授業に導入した大きな成果として考えてもよいのではないだろうか。APPENDIX V は小樽商科大学で平成 14 年後期の授業で行ったアンケートの結果をまとめたものであるが、洋楽を一部取り入れた筆者の授業を半年受講した結果、「普段洋楽を聞くとともに、歌詞をできるだけ聞き取ろうと思うようになった」「洋楽をただ聞き流すだけでなく歌詞を聞き取ろうとするようになりました」「今まででは、無意識に聞いていた曲も言葉に注目するようになった」などのコメントがあるように、意識的に英語の音を追う習慣が形成された者が少なくないことがわかる。

### 3：洋楽の選択から教室内での実践まで

#### 3-1. 洋楽の選定

担当のクラスには、学習レベルの差や雰囲気や求めるニーズの違いなど、担当者のみが授業の経緯の中で知りうる考慮すべき事情が多い。授業で使用する洋楽の選曲については、新たな事情を考慮して、準備していた曲をやめ、代わりに学生のアンケートなどで流行の曲を選んで準備することもあり得るが、教師自身の嗜好も選曲の重要な決定要因となることを忘れてはならない。Graham (1992, p. 44) は、次のように提案している：

The type of music that you select to present to your class will depend on the students themselves and your own musical background and experience. In general, I think it's a good idea to stick with music that you yourself love and feel comfortable with.

しかし、この基準だけでは教材としてふさわしいものが選ばれる保証はない。個人的嗜好を優先させるだけでは、特定のジャンルに偏り、語彙、音声的にも教材として不適切なものになりかねない。以下に示した基準を考慮の上、選定すべきである。

### 早すぎない明確に発音された聞き取りやすい曲

言うまでもなく教材として使用するのが目的なので、聞き取り能力の習得を促進するものでなければならない。また、まったく聞き取れない曲は、学習者の意欲を削ぐだけでなく、自信を喪失させてしまう。そのためには明瞭な発音で歌われていることが望ましい。

また、洋楽の歌詞は、日常の会話の速度よりずっと早く発音されるものから、かなりゆっくり発音されるものまで、多種多様である。目的や学習者のレベルに合わせて選曲するには、日頃から教師の方で多くの洋楽に接し、新曲を聞いた時にも、自分の担当するどのクラスに適切であるかという意識を持つことが大切である。

### 不適切な表現が含まれていない曲

洋楽の歌詞は、常に文法的であるとは限らず、歌としての美しさが優先されることがよくある。また、歌詞の内容も論理的で明確な内容のものから主観的で印象的かつ抽象的なものも多く、いったい何を伝えようとしているか、不明なものも少なくない。同様に、語彙や表現についても日常ではあまり使用しない大きな表現や俗語や卑語も出てくるものもあり、曲の選定には細心の注意を払わなければならない。

一般に教育上不適切と考えられる表現が出てくる曲は避けた方が無難である。音楽は記憶に残りやすく、不適切な表現も流すだけでは済まされないことがある。いつどこでふと出てしまうか予測できないものである。幼児向けの曲などはその点安心できるが、ロックなどで人を中傷する表現が使われていたり、“He don’t …” や “He ain’t …” など学習者には使ってほしくない表現が頻出するものが少なくない。この点に関して Graham (1992, p. 43) は、次のように述べている：

While the songs themselves may be superb, the lyrics can be so ungrammatical that they would only add to the confusion of the new language learner. For example, “I ain’t gonna work on

Maggies' farm no more.”

ここで指摘したいのは、“the new language learner” という記述であり、英語の基本を学んでから入学してくる大学生については、事情をしっかりと説明すれば混乱することはないものと考えられるが、知的財産として洋楽を持ち歌にしてあげるからには、やはり適切な内容を適切な語彙や文法で書いた歌詞の曲を選びたいものである。

### 教室内の使用に適切な長さの曲

大学の講義のように 90 分もあれば別であるが、中学・高校のように 50 分程度の授業では、あまりにも長い曲は適切ではない。そのような場合は部分的に使用したり、何度かの授業に分けて分割して行う方法も考えられる。筆者の大学の授業では授業の初めの 15 分以内に聞き取りから合唱まで終らせようとしている。

### 筆者が授業で実際に使用している洋楽

以上の 3 点の基準を考えると、ヘビメタやラップよりもオールディーズやポップスがふさわしく、街角の BGM でよく耳にする、時代は古いもののスタンダード曲として今もお耳にする、The Beatles、Elvis Presley、Carpenters、ABBA、Simon & Garfunkel などの曲が望ましい。以下の表は、筆者が選定し、毎年のように使用している洋楽のリストである。

表：筆者が授業で使用する洋楽のリスト

1 : Eye of the tiger	11 : Y. M. C. A.	21 : Love me tender
2 : Dancing queen	12 : In the navy	22 : Can't help falling in love
3 : Yesterday once more	13 : Sukiyaki	23 : Mr. Lonely
4 : Believe	14 : Stand by me	24 : El Condora Pasa
5 : Bridge over troubled water	15 : Yesterday	25 : Top of the world
6 : My heart will go on	16 : Take me home country road	26 : Last Christmas
7 : Crazy for you	17 : Unchained melody	27 : Tears in heaven
8 : For your eyes only	18 : Candle in the wind	28 : What a wonderful world
9 : Go west	19 : Pretty woman	29 : That's what friends are for
10 : New York city boy	20 : Imagine	30 : We are the world

このリストは、国立大学の通年の英語授業のシラバスに掲示しているもので、毎時間1曲ずつ使用し、全部で30曲を用意している。授業ですぐ使用できるように120分のオーディオテープに30曲全部収録したものを用意している。クリスマスの頃に26の曲が使用するなど、配列には季節のことを考慮に入れている。

このリストの曲は、過去12年間の授業の積み重ねで、学生からのフィードバックを基に何度も入れ換えを行ってきたものである。Murphy(1985)は、学習者自身を理解し、最新ポップスについて情報を得る方法として、好きなアーティスト、曲名などの調査を行うことを奨励している。このリストの中には、筆者の授業の中で課題として授業で扱っている曲以外に好きな曲を選んで歌詞と録音テープを提出させる課題を出したことがあり、7、19、23、27、28の5曲は、その際に追加されたものである。

### 3-2. 洋楽の聞き取りシートの作成

授業での配布物は、受講生だけではなく、友人、他の教官、親の目にまで触れる可能性があり、十分適切で誤りなどないように気をつけなければならない。また、教師の個性や感性が反映されるものであるので、学習者を思い遣り、わかりやすく、ためになる情報を盛り込み、欠席した学習者が後日見てもわかるものが理想である。以下の点に注意してシートをあらかじめ1年分ぐらい作成し、毎回の授業での、フィードバックを基に直していくとよい。

#### STEP 1: LISTENING FOR COMPREHENSION (内容把握)

歌詞カードを見ないように指示し、全神経を耳に集中させ、聞かせる。この際におおまかな内容が理解できるように、あらかじめ設問を設け、聞き取りのポイントを学習者に定めさせる。このプロセスを一度踏んだ上で次の音声認識に移行するとよい。

APPENDIX Iにある Bridge Over Troubled Water の例を挙げれば、内容把握のタスクは、以下のような question & answer (質疑応答)、true or

false(内容真偽)、sentence completion(文完成)などがあるが、時間の関係や学習者の負担などから項目はひとつに絞った方がよいだろう。歌詞の一部分に言及したのではなく、おおきな歌詞全体のテーマやさび(refrain)の部分に表れやすい歌詞全体の主旨を問うように作ることが理想である。

### question & answer(質疑応答)

Listen to the song and choose the best answer to the following question.

Question: What will the singer do if his friend is in trouble?

- A) He will encourage his friend to help himself.
- B) He will advise his friend to calm down.
- C) He will try to comfort his friend.

### true or false(内容真偽)

Listen to the song and check “T” if the following statement is true about the song; choose “F” if it is not.

Statement: The singer’s friend became successful after a hard period of time. (T/F)

### sentence completion(文完成)

Listen to the song and choose the best phrase to complete the following sentence.

Sentence: The singer is ready to -----.

- A) comfort him when his friend is in trouble
- B) tell him how to overcome his trouble
- C) persuade him to change his course of life

## STEP 2: LISTENING FOR PERCEPTION(音声認識)

内容把握の後には、音声変化が豊富な洋楽の特徴を活かし、音声認識のタ

スクを行う。一般的なタスクとしては、空欄穴埋め、語彙選択、相違箇所の指摘、並べ替えなどがあるが、以下、空欄穴埋め、語彙選択を作り方を説明する。

### レベルに合わせた空欄と選択

曲全体や一定の長さをディクテーションする方法は有効であるが、何度もテープを再生しなければならず、1、2回しか再生できない授業時間の制限からは、簡易化した空欄穴埋めや語を選択する形式の方が適切である。全文ディクテーションなどは課題として出したり、まとまった時間が取れた時に行う方がよいかも知れない。

また、空欄や選択の箇所の数はレベルが上がるほど増やすとよい。低いレベルでは、いまどの部分を歌っているかを把握することさせ困難なこともあるのですべて選択にした方がよい。選択する語彙もスペルが難解で書く時間がかかるものはさけ、日常生活での使用頻度の高いものを選ぶようにする。

### さびの部分に空欄

さびの部分は、繰り返し聞く機会があるので、その分難しい部分を選び、選択よりも空欄にして、聞き取った単語またはフレーズを書き入れるようにする。レベルに応じて、単語のスペルの一部を以下のようにあらかじめ書き入れたものを提示するのもよい。

例1) There are people dying and it's time to (2: l\_\_\_\_) a hand (We are the Wolrd)

例2) We can't go on (4: p\_\_\_\_\_ing) day by day

### 選択項目

さびの部分に対して、他の部分は通常一度しか聞くことができないので、それだけ答え方が容易な方法にしなければならない。語彙選択の形式にする場合は、なるべく学習効果があるように、ミニマルペア、同音異義語や音声

的に紛らわしい組み合わせを考える。

例3) We are the ones to make a (2: better/brighter) day (We are the World)

例4) When (1: a tear/tears/the tears) ... (Bridge Over Troubled Water)

例5) I will (6: call on/count on/comfort) you. (Bridge Over Troubled Water)

### 適切な間隔

空欄や選択を作る箇所の間隔は、学習者のレベルや曲を歌う早さによって異なるが、最低5語分は間隔を開け、1行に2か所以上は作らない方がよい。シートを作成する際に、実際に自分自身で書き取りを行ってみたり、タスク中に学習者の表情や手元をよく観察することが大切である。

### 3-3. テープの再生と解答

#### 再生速度

洋楽の中には、早口のため母語話者にも聞き取れないものもある。学習者のレベルの応じて速度調整機能が付いたカセットプレーヤーで再生速度を調整することも可能である。この点、CDやMDよりも従来のオーディオテープの方が便利であるが、速度を落としても洋楽独自の音声変化のために、何度ゆっくり再生しても聞き取れない場合もある。それが歌詞の一部であれば、空欄などをそこに作らないことで問題はないが、歌詞全体がそうである場合は、1度聞かせた後で、教師がゆっくりと音読してあげることも考えられる。

#### 再生回数

Kanel(1995、1997、1999)は、全体を少なくとも2度再生する必要があると主張しているが、現実には洋楽専用のクラスではない限り、1度しか再生できない場合があるので、1度聞いただけでタスクが完成できるように、空欄

や語彙選択も無理がないものを作成しなければならない。また、全体を再生せずに、特定の難解部分を2、3度聞かせることが必要なのかも知れない。

### 停止

基本的には一度再生させたら、曲の終わりまでそのまま聞かせるのだが、書き取りの時間を与えたり、学習者の様子から、どの部分が歌われているのかわからなく混乱していることがわかれば、即座に停止し、巻き戻してやり再生し直さねばならない場合も考えられる。よく学生の顔の表情や手元を観察しなければならない。

### ボリューム調整

ボリュームで一番気をつけなくてはならないことは、学習者への配慮よりも現実には他の教室や廊下への音の漏れである。筆者は日米の大学において、何度も再生中に他の教員から授業中または授業後に激しく抗議された経験を持つ。それを避けるためには、ヘッドホンを使うか、ない場合はボリュームを下げて耳をそばたてるよう聞くように指示する。また、上級者の場合は、故意的にボリュームを下げるか、テープを再生させながら手を叩いたり呼び鈴を鳴らすなどの雑音を入れることで、目標音声により集中する訓練を取り入れることも考えられる。

### 解答

時間の配分を考慮し、この部分はなるべく簡潔に時間をかけないようにしたい。しかし、テストではなくタスクとして音声認識能力を高めようとしているので、解答に至るプロセスをしっかりと説明したいところである。一般的には、まず全体の解答を教師が口頭で上から下まで全部言ってから必要に応じて解説するようにしたい。時間の余裕があれば、再び再生して、空欄や選択の部分が流れた時点で停止し解答する。必要な解説や聞き取りの注意点を教えるようにしたい。また、教師が一方向的に解答するよりも、何人かの生

徒・学生をあてたり、選択の場合は、挙手させるなどして、ある程度の緊張感を与えておかないと、真剣に聞き取ろうとしない者が現れるので状況に応じて判断しなければならない。

### 3-4. 語彙、文法、音声解説

#### 歌詞の和訳

空欄や語句選択の解答後、歌詞の全部または一部を日本語に訳すこともできる。ただし、これには膨大な時間を要するため、洋楽専用の授業でない限りは省略するか、あらかじめ和訳をハンドアウトに載せておくか、またはタスク後に別紙で配布するとよい。一部分を指名して和訳させたり、和訳を逆に英訳させ、歌詞と比較し添削するタスクも可能である。

#### 重要表現や文法

時間の許す限り歌詞の中の表現が日常生活でどのくらい使用されるものか、またどういう時に使える表現であるか説明するようにしたい。文法的な知識を確認したり特定の文法事項の復習に活用できる例も多い。

例えば、以下は Carpenters の Yesterday Once More の一節の語彙選択である。

It was songs of love that I would sing to (8: them/then/there)

これは歌詞を実際に聞かなくても “then” と分かるが、その理由をきちんと説明できる学習者は以外に少ないかも知れない。そのため選択にしてもよい箇所と言える。実際聞いて見ると “them” と “then” は一音節のミニマルペアであるために聞き分けは困難である。このような場合は、文法的な知識を活かして決定することが実際の英語使用場面ではよくあることである。また、次の例は Celine Dion の My Heart Will Go On の一部である。

Far across the (4: distance/distances) and (5: space/spaces) between us.

それぞれ distance と spaces が正解であるが、前の例のように聞く前から選択するのは難しい。両者とも可算名詞にも不可算名詞としても使われることもあるので文脈で決定されることになる。筆者は実際に何人かの英語のネイティブスピーカーになぜ distance と spaces という単複の違いが生じるか聞いたことがあるが答えに窮する人が多かった。

文法的な面についても学校文法で非文法的とされる文が含まれる歌詞は使用しない方がいいと思われるが、教育的な配慮からむしろそれを指摘する作業を教室内で行う場合も可能である。例えば、Simon & Garfunkle の Bridge Over Troubled Water (明日にかける橋) に次の一節がある。

*When you're weary, feeling small.  
 When tears are in your eyes, I will dry them all.  
 I'm on your side, oh, when times get rough.  
 And friends just can't be found  
 Like a Bridge Over Troubled Water I will lay me down.  
 Like a Bridge Over Troubled Water I will lay me down.*

この中で下線部の文は明らかに非文であり、本来なら me は再帰代名詞の myself にしなければならないところである。これは教師よりも学生に正しい形に書き改めるよう指示すべきである。また同時に、なぜ非文が使用されているのかを説明しなければならない。これは作詞者の教養が原因ではなく、あくまでも音楽性に基づく表現であり、単に歌いやすさからこうなると説明するのが妥当と考えられる。このさびの部分は “I will lay myself down.” とすると演奏に合わなくなり、早口で歌わなくてはならなくなる。歌詞に曲を付けたのか、その反対なのかは定かではないが、この部分に関しては、曲の方とはとてもよい連結となっている部分であり、音学性が文法性より優先されたものと考えられる。「歌詞ではよくあることだ」ということを学生に説明することは重要であり、歌詞をそのまま真似て使用してはいけない場合があることを教える必要がある。

### 音声変化

洋楽を使用したリスニングの意義は、語彙文法よりもその音声にあると言える。(Brown & Helgesen, 1986) 調音、ストレス、イントネーション、リダクション、コントラクションなどの音声学的知識を学習者に実際に音を聞かせながら例示することが可能である。特に、リダクションとコントラクションは、洋楽には多く発生し、中でもカントリーは豊富である。(Griffiee, 1986, p. 20) そのため、特定箇所を何度も再生することも必要である。

歌手の個人的癖や曲の特質からかなり変わった発音を聞くことがあり、歌詞カードを見比べても納得できない場合もある。例えば、次の歌詞は We Are The World の一節で Syndy Louper が歌う “Let’s realize that a change will only come.” 部分は、何度聞いても歌詞の通りには聞こえないとほとんどの学生は言う。

また、ある曲の一部が日本語のように聞こえるものがある。これを専門に取扱ったテレビ番組が TBS の金曜日に放映される「タモリ倶楽部」の「空耳アワー」である。視聴者から番組に送られた英語に限らず海外の音楽で日本語のように聞こえる部分をビデオクリップにして1分程度のドラマ仕立てにして紹介している。例えば、以下の例は筆者が授業で実際に使用したものである。筆者は収録した番組の中から面白そうなものを授業で使うことがあるが、学生の反応はたいへんよい。番組自体は教育的とは言えないものの、このコーナーについては、音声の不思議を体感させられ、重宝する。

#### オリジナル

#### 空耳

- |   |              |
|---|--------------|
| (1) She’s shaking like dashboard doll.              | 人生ゲーム投げ出しもうた |
| (2) I’m not good for better.                        | 何を押すと出る？     |
| (3) should’ve been, could’ve been,<br>would’ve been | 白べん、黒べん、和田べん |

番組ではただ「不思議ですねえ」を連発するだけで音声学的な説明は一切ない。教師としては使用するからには、何らかの音声学的説明を加えたいと

ころである。ここで特記しておきたいのは、ビデオクリップの中でオリジナルがスーパーで画面上の提示されるのだが、正確でない場合がある。例えば、上記の(3)は放送当時(平成10年)では、“sould of being, could of being, would of being”と表示されていた。“sould”は“should”の間違いであることは明白であるが、ofについてはこのような文法もあるのかと聞き流してしまった視聴者も多かったのではないだろうか。これには筆者も一瞬当惑し、番組に問い合わせ確認したわけではないが、これは助動詞とbeingの間にはhaveはあり得ないし、ofに近い音として“-ve”という短縮形であると考え、beingはbeenの間違いであるに違いないと当時授業で説明した。それが平成13年の年末の特別番組で同コーナーの過去の傑作集で(3)のビデオクリップが流れた時には、私が指摘したように訂正されていた。

### 3-5. 合唱

#### 全員で合唱

音声的説明はただ納得させるだけでなく、実際に音声器官を使って体感させることが大切である。そのために全員き起立させ、教師自ら先陣を切ってテープに合わせて歌う。音量は聞き取りに使用した時とほぼ同じでよい。なるべく歌詞カードに頼らず顔を上げて歌うように指示する。そのためにOHCなどでシートを提示し、それを見ながら歌うように指示する。また、筆者は収録された曲がある時はDVDのカラオケソフトを利用している。

#### 教師に求められる姿勢

この際に注意しなければならないのは、教師自身が恥ずかしそうにしたりためらった様子を絶対に見せてはならないことである。Brown & Helgesen (1986, p. 10)は、教師自身のためらいについて、以下のように述べている：

When talking to other teachers, we often hear “But I’m not a good singer!” None of the techniques suggested require singing and we have, at times, used them without having the students sing. One of us can get by at karaoke, the other is tone deaf. But usually we sing and the students do too. After all, that’s what songs are meant for.

“None of the techniques suggested require singing”の部分は、彼らが論文で紹介している洋楽を使用した活動に限定される判断であって、ここで筆者が論じている洋楽を活用した活動では、合唱することを重視している。教師は、堂々と毅然とした態度で楽しそうに学生の方を見ながら大きな声で歌い、できれば歌いながら教室の中を1周、2周歩けば、歌っていなかった学生が歌い出すようになる。ただし、せかしたり、無理じいすることは避けるようにしたい。Griffie(1986)は、学習者は、まず歌い出す勇気を持つのに時間が要るので、あせらせたり、非難してはならないと主張している。

教師も一緒に合唱しなければならない。教師がためらえば、洋楽に限らず、学習者は学習項目として意識しなくなる。教師が授業中に英語をまったく話さない姿勢は、同時に英語は話さなくてもよいものであるというメッセージを送っているのと同じである。

### 3-6. シート使用しない聞き取りタスク

歌詞カードが入手できない、またはインターネット上から入手したり、自ら聞き取ってトランスクリプトを作成しているが、間に合わない、不明箇所が確認されていない、などの諸事情で聞き取り用のシートが準備できない時には、以下のタスクが好都合である。ここで紹介する4つのタスクは、洋楽に限らず、ニュース、洋画、テレビドラマなどあらゆるメディアのテキストにも応用できる。

### 特定語彙の頻度カウント (*word or phrase counting*)

Dissosway(1986)が提唱した方法で、単数形・複数形の双方が現れる楽曲を聞かせ、それぞれの形態が何度出てきたかを数えさせたり、特定の語彙項目、例えばloveが何度認識できたかを数えさせるものである。タスクを単純化し、聞き取りのポイントを絞ることで、闇のように不可解な歌詞の中に一点の光明を見い出そうとするもので、歌詞の聞き取りに対する心理的抵抗を緩和すると考えられるが、具体的な授業の進行形態については、触れられていない。

### 特定語彙の聞き取り (*focused listening*)

これは特定の品詞、統語機能、ジャンルの語句を書き取る方法で、これまで筆者が何度も改良を続けてきたタスクである。リスニングにおいては、学習者の左脳にある聴覚中枢からウェルニッケ領域に伝えられた音声は、意味ある単位に識別し区分する“segmentation”(Richards, 1987, p. 162)が意識、無意識のうちの行われる。区分されたそれぞれの単位には、語彙的、統語的ラベル化のいずれかが、または両方がほぼ同時に行われる。個々の要素の語彙的なラベリング(lexical labeling)だけでは、部分的にメッセージは理解できても全体を理解する正確さに欠ける。一方、個々の要素の統語的ラベル化(structural labeling)だけで構造が分かるだけでは意味は不明である。個々の要素は、その語彙的な意味と他の語との統語関係がほぼ同時に理解されることで記号解読作業が完了する。特定語彙の聞き取り作業は、そのプロセスを促進する一助になると考えられ、以下3つのレベルに分けられる。

第1は、動詞、形容詞、副詞などの特定の品詞だけを聞き取らせる方法である。品詞のラベル化は、文の中でのそれぞれの機能を特定し正確にセンテンスの意味を理解するために不可欠なプロセスである。

第2は、特定の機能を持つ語彙項目を聞き取らせる方法である。「主語」「動詞」「目的語」「補語」などを聞きながらラベル化することで文構造を理解し、正確なセンテンスの意味を理解できるようになる。

第3は、特定のジャンルの語彙項目を聞き取らせる方法である。数字や曜日、動物の名前などのジャンルを指定して行う方法である。ジャンル別の聞き取りは、現実の目標言語使用の際に必要な時がある。米国のグレイハウンドバスのバスディーポでは、乗り場の変更などの放送がかかることがあるが、そのような場合数字は聞き漏らせない情報である。同様に、リーディングでは、薬の注意書きなどは量を正確に素早く知る必要がある。すなわち、ターゲットとすべき情報(target information)と周辺の情報(peripheral information)の聞き分け訓練がこのタスクでできる。あらゆるジャンルの中で数字がもっとも顕著(salient)であり、実用性も高いが、他に人物名や職業、場所を表す語句、頭字語などもよい。

筆者の授業では、品詞とジャンルの組み合わせ、数字、動詞、形容詞、その他を座席ごとに割り当て、ペアワークで聞き取らせ、共同作業させる。通常2回聞かせているが、インターバルごとに各グループ内で相談させた後、グループの代表に板書させ、同一の特定語彙を指示された他グループとの比較をさせる。また、氏名と共にグループ全体でまとめて書いた紙をタスク後に提出させるようにしている。実際は、洋楽について、このタスクを実際に使用することは少ないが、早朝に収録し、スクリプトがなかったり、よく見えていないテレビやラジオのニュースを授業の導入部に使用している授業では、洋楽に引き続いて行くと、学生はその音声の特徴が観察できてよい。また、シートが準備できている曲についても、1度目は内容把握、2度目にこの特定語彙の聞き取り、そして3度目に空欄穴埋めや語彙選択のシートを使用したタスクを組み合わせることも可能である。他のタスクについても同様なことが言えるが、学生に真剣にタスクに参加させるためには、ペアワークやグループワークによって他者との係わりを作り上げたり、シートを授業の終わりに回収し後日返却するなどして責任感を持たせることが大切である。

### 特定語彙に対する身体反応 (Total Physical Response)

記憶の保持と想起は、視覚だけでなく、聴覚、触覚など複数の感覚を動員

することで、より強固なものとなると主張とする Asher(1977)によって開発された TPR(Total Physical Response)<sup>7</sup> は、歌詞の中に含まれる日常会話のフレーズや前記の特定語彙の聞き取りタスクにも応用できる。実際に聞いて歌いながら覚えると、記憶に深く切り刻まれる。その後、曲を聞けば自然とその表現が想起されるようになる。

Paulston(1971)は、タスクには“mechanical response”(機械的応答)、“meaningful response”(意味ある応答)、“communicative response”(意思疎通の応答)の3つのいずれかを求める性質があるとしている。機械的応答とは、音声認識は求められるが内容理解を必要としない聞き分け(discrimination task)のことである。意味ある応答とは、内容理解と音声認識の両方が求められる指示に従って何らかの行動などである。意思疎通の応答とは、これに創造的な要素が加わったもので、問題が提示され、その解決策を提案するような場合が考えられる。この範疇をあてはめると、音声認識に対する身体反応は、機械的応答と意味ある応答の中間に位置するものと考えられる。

TPRを特定語彙の聞き取りに応用する具体的な手法として、少数(3~5人)の学生ごとにサークルを作らせ、指令を受ける学生をひとり選ばせる。椅子の移動が困難な形成の場合は、座席の最前列の前に、指令を受ける学生を立たせ、その列の学生と対面させる。指令を与える学生をいったん教卓の方へ集め、それぞれ違う特定語彙を与え、聞き取れたら片方の手を他の学生にはっきり見えるようにあげるように指示する。他の学生は、その指令を受けた学生が手をあげる直前に何が聞こえたのか、その特定語彙は何かを当てさせるタスクである。他の学生は、その語彙が分かった時点で同様に手をあげさせる。2、3分と経過していくうちに、かなりの数の学生が手をあげるようになり、一定の緊張感が生まれ、集中力が増す。また、動詞の時は左手、形容詞の時は右手、数字の時は両手を挙げるなど複雑にすることも可能である。授業はかなり盛り上がりぜひ実施していただきたいタスクである。

### 全文書き取り (*dictation*)

英文を書き取る作業は伝統的な手法であるが、洋楽に限らず、洋画やニュースなどにも有効であり、その有益性は以下の記述からも明らかである。

書き取りは英語の学習活動のうち単に書くことの領域だけの技術だけではなく、そのほか聞く・話す・読むの全領域にわたる技能の総括的な学習活動とみなされているので、英語の授業においては不可欠なものであり、その実施方法・内容・程度などについては指導手順上かなりの考慮が払われてよいと考えられる。(小川他、1982, p.149)

全領域にわたる技能的な学習活動の内容に関しては、Gower & Walters (1983, pp. 107-108)が以下の5技能がディクテーションには必要であると述べている：

- identify sounds when run together in connected speech
- understand what they represent in terms of words
- understand and to a certain extent interpret what the words mean when grouped together
- transfer what they hear into the written mode
- write quickly with few spelling mistakes

また、彼らは“*There are also usually severe limitations on the time that can be taken to do these things!* (pp. 107-108)”とし、時間を十分与えることの重要性を訴えている。

LL教室などで各席に卓上の録音機能が付いている場合、マスターからダビングして、学習者がそれぞれのペースで一定時間内に、ヘッドフォンを使用して何度も再生を繰り返して曲全体、または一部をディクテーションすることができる。上級者の場合は1時間ぐらい時間を与えて、全文をディクテーションさせることもできる。時間的に授業内では行うことができなければ、課題として出してもよい。根気を要する作業であるが、各自操作させることで画一的な一斉授業の弊害としてあげられる学習者の個人差への無配慮が克服でき、苦手な音などを個別に特定することが可能となる。洋楽に限ら

ず、ニュースなどを使う時にも導入してはどうだろうか。

### 3-7. 他技能への応用

#### reading

洋楽の歌詞は、リーディング用の英文(散文)として活用することが可能である。Dissosway(1986)は、リーディング活動の定番である内容理解問題のために、音楽をかける前に歌詞を配付し、“an enjoyable extra”(p. 22)として、かけた後に解答する方法を提唱している。また、同氏はテキストの構成(organization)を理解するために、“strip songs”(p. 20)を勧めている。ただし、初級者には、洋楽を聞かせながら並べ替えさせるよう説明しているが、これでは単なる音声認識タスクになってしまうので、並べ替えさせた後に解答を兼ねて聞かせる方がよい。

また、歌詞を詩の鑑賞のように扱い、精読教材として扱うことも可能である。Gray(1992, p. 17)は、洋楽の歌詞の理解に必要な要素として、“slang” “background cultural information” “basic English poetics”を挙げ、3番目については、以下のように述べている：

Teaching Japanese students how to approach English language song lyrics as poetry increases their employment and understanding of songs, and it prepares them for dealing with other poetic use of English.

#### writing

Graham(1992)は、洋楽を使って特定の語彙や構文を教えられるように、自ら作詞して音楽を付けて歌わせる方法を提唱している。さらに一歩進んで、学習者自身に作詞させ、好きな洋楽を付けて歌わせることも可能である。歌詞全体は、たいへんな作業なので、一部分などに限定し、何通りも作らせて発表させ、互いに評価させてはどうだろうか。また、作詞に至らなくて、既存の歌詞を好きなように書き直して音楽を付けて歌わせたり、悲しい曲を楽

しい曲に、または反対に、悲しい曲を楽しい曲に変えるように指示を与え、学生同士で批評し合うタスクも可能ではないだろうか。いずれの方法も筆者自身は、まだ実践していない段階であるが、大きな可能性を感じられずにはいられない。

### speaking

歌詞の内容や歌手に関して、何らかの評価基準をあらかじめ用意してペアワークやグループワークをさせ、さらにディスカッションなどに発展させることは可能である。現在発行されている数冊の大学のテキストの中には、プレ・リスニング活動またはポスト・リスニング活動として、以下のような質問を載せているものがあり、ペアワークで質疑応答させ、スピーキングの発展されることが可能であることを示している。

1) TEXT: *12 Great Hit Songs* (Someya, Murray & Ferrasci, 1999, p. 12)

Celine Dion が歌う *My Heart will Go on* を扱った章のプレ・リスニング活動として：

1. Did you see the movie *Titanic*? What did you think of it?
2. Do you remember who was singing the theme song?
3. How much do you know about Celine Dion?

2) TEXT: *Alive Jives: Studying English with the Hottest Hits* (Moriguchi & Kimura, 2002, p. 25)

Ricky Martin が歌う *Living la Vida Loca* を扱った章のポスト・リスニング活動として：

1. What are the advantages and disadvantages for Japanese people who are talented in sports, art, music, etc. to work abroad?
2. What abilities and personality traits do you think are necessary for being internationally active and successful?

3) TEXT: *The Greatest Movie Songs* (Tsuda, 2001, p. 25)

Diana King が歌う I Say a Little Prayer を扱った章を扱った章のポスト・リスニング活動として：

1. Why do you think the singer prays for her lover?
2. When was the last time you prayed? What did you pray for?

いずれの質問内容も、歌詞の中に答えが見出せるものというよりも、そこから発展させた創造的な質問であることがわかる。授業時間に余裕があれば、洋楽は聞き取りだけではなく、他技能まで含んだ活動を行うことが可能であり、英語の総合力を高める本格的教授法として発展する可能性が大いにあると言える。

#### NOTES:

1. 筆者が担当する 2002 年度の小樽商科大学商学部の 1 年生の英語上級者用のクラス(通年)で、2002 年の 11 月に実施したアンケート調査。アンケートの内容と結果は、APPENDIX IV と V を参照。
2. 日本社会の国際化に伴い、日本国籍者が日本語の母語話者ではないケースを考慮し、同論文では、日本語の母語話者に対して「日本人」は使わず、より正確に「日本語母語話者」を一貫して使用する。
3. TOEIC (Test of English as an International Language)：米国の ETS (English Testing Service) が作成する世界共通の英語力試験で、日本では財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会 TOEIC 運営委員会が実施している。同協会では、TOEIC の得点と英語能力のレベルについて A (990-860)、B (860-730)、C (730-470)、D (470-220)、E (220-0) の 5 段階のガイドラインを設けており、A ランクについては、「ノン・ネイティブとして十分なコミュニケーションができる」レベルとしている。
4. ウェルニッケ領域 (Wernicke's area)：左脳のやや後方に位置し、発話理解 (decoding) に重要な役割を果たす領域。
5. ブローカー領域 (Broca's area)：左脳のやや前方に位置し、発話 (encoding) にかかわる領域。
6. 運動制御領域 (motor control area)：左脳のやや上方に位置し、発話器官 (articulatory organs) を制御する領域。
7. TPR (Total Physical Response)：Asher が開発した学習項目が、学習者の身体的な反応を求める命令や指示の形で、目標言語 (target language) で提示される全身反応教授法。

## REFERENCES

- Asher, J. (1977). *Learning Another Language Through Actions; the complete teacher's guide book*. Los Gatos, CA: Sky Oaks Productions.
- Brown, S. & M. Helgesen. (1986). Stories into songs ... into stories. In *The Language Teacher: (Ed. D. Griffee), vol. X, No. 10*, 8-12.
- Buck, R & T. Axtell. (1986). Music & foreign languages complementary fields of endeavor. In *The Language Teacher: (Ed. D. Griffee), vol. X, No. 10*, 4-7.
- Dissosway, P. (1986). Songs in non-aural/oral settings. *The Language Teacher: (Ed. D. Griffee), vol. X, No. 10*, 19-22.
- Ferrasci, F., Murray, P and M. Someya. (1999). *12 Great Hit Songs*. Tokyo: Eihosha.
- Gower, S. & S. Walters. (1983). *Teaching Practice Handbook: A reference book for EFL teachers in training*. Oxford: Heinemann.
- Graham, C. (1992). *Singing, Chanting, Telling Tales: Arts in the Language Classroom*. Englewood Cliff: Prentice-Hall, Inc.
- Gray, P. (1992). Using song lyrics to introduce poetry. *The Language Teacher, vol. XVI, No. 7*, 17-20.
- Griffe, D. (1986). My share: part I In *The Language Teacher, vol. X, No. 10*, 18-19.
- Kanzaki, H. (1987). *Pops and English*. Tokyo: Nanundo.
- Kanel, K. (1995). *Pop Song Listening*. Tokyo: Seibido.
- Kanel, K. (1997). *Enjoy Pop Song*. Tokyo: Seibido.
- Kanel, K. (1999). *Hit Song Listening*. Tokyo: Seibido.
- Kumai, N. & S. Timson. (1999). *Hot Beat Listening: Book 1*. Tokyo: Macmillan Language House Ltd.
- Kumai, N. & S. Timson. (2002). *Smash Hit Listening*. Tokyo: Macmillan Language House Ltd.
- Maekawa, T. & C. Dermer. (1999). *Screen Vocal Listening*. Tokyo: Kinseido.
- Miller, S. (2000, March). Using songs to teach. Paper presented at TESOL 2000 Convention at Vancouver, Canada.
- Moriguchi, L. & K. Kimura. (2002). *Alive Jives: Studying English with the*

- Hottest Hits*. Tokyo: Nanundo.
- Murphy, T. (1985). Teaching for peak relevance using international pop music. *TESOL Newsletter*, XIX, 6: B.
- Ogawa, Y. (1982). *Sanseido's Dictionary of English Language Teaching: New Edition*. Tokyo: Sanseido.
- Paulson, B. (1971). The sequencing of structural pattern drills. *TESOL Quarterly* 5, 197-208.
- Richards, J. (1987). Listening comprehension: approach, design, procedure. In M. Long & J. Richards (Eds.), *Methodology in TESOL: A Book of Readings*, 161-176. New York: Newbury House Publishers.
- Steinberg, D. (1993). *An Introduction to Psycholinguistics*. London: Longman.
- Tsuda, J. (2001). *The Greatest Movie Songs*. Tokyo: Kinseido.

## APPENDIX I

*Bridge Over Troubled Water*

by Simon and Garfunkel

**STEP 1: LISTENING FOR COMPREHENSION****Listen to the song and choose the best answer to the following question.**

Question: What will the singer do if his friend is in trouble?

- A: He will encourage his friend to help himself.  
 B: He will advise his friend to calm down.  
 C: He will comfort his friend.

**STEP 2: LISTENING FOR PERCEPTION****Fill in the blanks or choose the word you hear as you listen to the song again.**

When you're weary, feeling small.

When (1: a tear/tears/the tears) are in your eyes,I will (2: try/dry/cry) them all:I'm on your side, oh, when times get (3: right/rye/rough)

And friends just can't be found

Like a Bridge Over Troubled Water

I will (4: \_\_\_\_\_) me down.

Like a Bridge Over Troubled Water

I will (5: \_\_\_\_\_) me down.

When you're down and out.

When you're on the street.

When evening falls so hard.

I will (6: call on/ount on/comfort) you.

I will take your part.

Oh, when darkness comes

And (7: pen/pain/pair) is all around.

Like a Bridge Over Troubled Water

I will (8: \_\_\_\_\_) me down.

Like a Bridge Over Troubled Water

I will (9: \_\_\_\_\_) me down.

Sail on (10: silver/silly/super) girl, Sail on by.Your time has come to (11: shy/shine/shout).

All your dreams are on their way,

See how they (12: shy/shine/shout),

Oh, if you need a friend

I'm sailing right (13: behind/beside/beyond).

Like a Bridge Over Troubled Water

I will (14: ease/easy/easily) your mind

Like a Bridge Over Troubled Water

I will (15: ease/easy/easily) your mind.**STEP 3: Let's Sing!****Now stand up and sing this song together.**

## APPENDIX II

*WE ARE THE WORLD*

Word & Music by M. Jackson & L. Richie  
(for junior high school students)

**STEP 1: 内容理解**

一度聞いてどういう内容の歌詞なのか確認しよう。

**STEP 2: 音声認識**

もう一度曲を聞いて、空欄から聞き取った単語を選ぶか、空欄に書き入れよう。

There comes a time when we heed a certain call  
When the world must come together as one  
There are people dying and it's time to lend a hand  
To life greatest gift of all  
We can't go on pretending day by day  
That someone somewhere will soon make a change  
We are all a part of God's (1: gray/great) big family  
And the truth you know love's all we need  
We are the world We are the children  
We are the ones to make a (2: better/brighter) day so let's (3: \_\_\_\_\_) giving  
There's a choice we're making  
We're saving our (4: all/own) lives  
It's true we make (5: better/brighter) days just you and me  
Send me your heart so they'll know that someone cares  
And their lives will be stronger and free  
As God's shown us by turning stones to (6: red/bread)  
So we all must lend a helping hand  
We are the world We are the children  
We are the ones to make a (7: better/brighter) day so let's (8: \_\_\_\_\_) giving  
There's a choice we're making  
We're saving our (9: all/own) lives  
It's true we make (10: better/brighter) days just you and me  
When you're down and out, there seems no hope at all  
But if you just (11: believe/live) there's no way we can fall  
Let's realize that a change will only come when we stand together as one  
We are the world We are the children  
We are the ones to make a (12: better/brighter) day so let's (13: \_\_\_\_\_) giving  
There's a choice we're making  
We're saving our (14: all/own) lives  
It's true we make (15: better/brighter) days just you and me  
(REPEAT 9 times)

**STEP 3: 合唱**

テープを聞きながらみんなで元気に歌おう！

## APPENDIX III

## WE ARE THE WORLD

Word &amp; Music by M. Jackson &amp; L. Richie

*(for senior high school students)*

## STEP 1: LISTENING FOR COMPREHENSION

Listen to the song and choose the best answer to the following question.

Question: What are the singers calling for?

A: They are calling for lending a helping hand.

B: They are calling for saving our own lives.

C: They are calling for being stronger and free.

## STEP 2: LISTENING FOR PERCEPTION

Fill in the blanks or choose the word you hear as you listen to the song again.

There comes a time when we (1: heel/heed/hear) a certain call

When the world must come together as one

There are people dying and it's time to (2: \_\_\_\_\_) a hand

(3: tonight/to lie/to life) greatest gift of all

We can't go on (4: \_\_\_\_\_) day by day

That someone somewhere will soon (5: \_\_\_\_\_) a change

We are all (6: a part of/a power of/parlor) God's great big family

And the truth you know love's all we need

We are the world We are the children

We are the ones to make a (7: better/brighter) day

so let's (8: \_\_\_\_\_) giving

There's a choice we're making

We're saving our own lives

It's (9: \_\_\_\_\_) we make (10: better/brighter) days just you and me

Send me your heart so they'll know that someone (11: \_\_\_\_\_)

And their lives will be stronger and free

As God's shown us by turning stones to (12: red/bread/blend)So we all must lend a (13: happy/heavy/helping) hand

We are the world We are the children

We are the ones to make a (14: better/brighter) day so let's start giving

There's a choice we're making

We're saving our own lives

It's (15: \_\_\_\_\_) we make (16: better/brighter) days just you and meWhen you're down (17: now/around/and out), there seems no hope at all

But if you just (18: \_\_\_\_\_) there's no way we can fall

Let's (19: \_\_\_\_\_) that a change will only come when we stand together as one

We are the world We are the children

We are the ones to make a (20: better/brighter) day so let's start giving

There's a choice we're making

We're saving our own lives

It's (21: \_\_\_\_\_) we make (22: better/brighter) days just you and me

(REPEAT 9 times)

## STEP 3: Let's Sing!

Now stand up and sing this song together.

## APPENDIX IV

## 洋楽を活用したリスニング活動に対する感想

平成 14 年 11 月 1 日 金曜日 1 講義目 E 109 A

所属学科：経済／商学／企業法／社会情報／商業教員

学 年：1／2／3／4 （入学：現役／浪人）

性 別：男／女／中間 年 令 満 \_\_\_\_\_ 才 母 語 \_\_\_\_\_ 語

英語資格：実用英語検定 \_\_\_\_\_ 級 トーフル \_\_\_\_\_ 点 トーイック \_\_\_\_\_ 点 その他 \_\_\_\_\_

01) 洋楽を聞くときに歌詞に注意を払っていますか。

 はい ⇒ \_\_\_\_\_ いいえ \_\_\_\_\_

02) 洋楽を使用した英語の授業をこの授業以前に受けた経験がありますか。

 はい ⇒ \_\_\_\_\_ いいえ \_\_\_\_\_

03) 洋楽を使用したこの授業の受講以来、英語学習に対する考え方や気持ちに変化が起きましたか。

 はい ⇒ \_\_\_\_\_ いいえ \_\_\_\_\_

04) カラオケやその他の場面（鼻歌含む）において、この授業で扱った曲を歌う機会がありましたか。

 はい ⇒ \_\_\_\_\_ いいえ \_\_\_\_\_

05) これまで使用してきた洋楽の選曲について何か言いたいことがありますか。

 はい ⇒ \_\_\_\_\_ いいえ \_\_\_\_\_

06) 空欄穴埋め、語彙選択、解説、合唱という一連の進行方法について何か言いたいことがありますか。

 はい ⇒ \_\_\_\_\_ いいえ \_\_\_\_\_

07) 洋楽を使用した授業は英語学習や習得に役立つと思いますか（感じますか）。

 はい ⇒ \_\_\_\_\_ いいえ \_\_\_\_\_

## APPENDIX V

## 洋楽を活用したリスニング活動に対する感想アンケートの集計結果

(原文そのまま)

対象：日本語母語話者 44名、中国語母語話者 4名、ベトナム語母語話者 1名

- 01) 洋楽を聞くときに歌詞に注意を払ってますか(はいの場合授業前と今を比較して書いてください)。

[ ] はい 40名 [ ] いいえ 9名

- ⇒ 自分でも歌いたくなると歌詞に集中する。
- ⇒ なんとなくでも意味を自分でわかろうとするためと英語の発音が気になるから。
- ⇒ 聞き取れないものもあるけど、最初聞くときには歌詞を見ないで聞く。
- ⇒ 2回目は歌詞を見て聞きとれなかったのをチェックしたりする。
- ⇒ 自分でも口ずさみたいので。
- ⇒ 歌詞カードを読みます。
- ⇒ この授業を受けるようになってから、洋楽を聴く時は歌詞の意味や言い回しに気を使うようになった。
- ⇒ 発音が一番気になります。
- ⇒ 頭の中で訳してみるとメロディーだけ知っている有名な曲も歌詞の意味がわかると違う感じ。
- ⇒ 何とかわかろうとはしてみる。歌詞カードがあったら読んでみる。
- ⇒ 歌詞を聞いてどんなことを言っている曲なのかを聞き取るようにしています。
- ⇒ ちゃんと歌詞の意味を理解しようとしています。
- ⇒ 以前は聞き流してしまっていたが、授業を受けてから注意して聞くようになった。
- ⇒ 歌の意味わかりたい。
- ⇒ 歌詞の意味と発音に関心がある。
- ⇒ なるべく意味を理解したい。
- ⇒ 歌詞の意味がわからなければ聞いて楽しめない。
- ⇒ 明らかなラブバラードのときだけ歌詞を気にしている。
- ⇒ カラオケで歌うために、歌詞カードを見ながらいつも練習しています。
- ⇒ 英語っぽくなるように。
- ⇒ 何度も聞いているうちに歌詞に注意を払うようになってくる。
- ⇒ あまりに意味不明な語があるときは歌詞カードと照らし合わせます。
- ⇒ 強く発音されている語を聞き取れるようにしている。
- ⇒ なるべく聞き取ろうと努力しています。歌詞を目で追いながら聴いたりします。
- ⇒ 曲調も大切ですが、なにより歌詞がその歌の良し悪しを決めると思っています。
- ⇒ 自分で歌えるようになりたいから。
- ⇒ 歌詞カードで日本語訳を見ながら聞いたり、日本語訳を覚えて考えながら聞いています。
- ⇒ どうしても聞き取れない部分とかあります。
- ⇒ 時々。
- ⇒ ゆっくりな曲のとき。
- ⇒ 歌詞の内容を見ても意味のないものばかり聞いている。
- ⇒ 語と語の間をどのように続けて発音しているか。
- ⇒ なるべく気をつけて聞いています。
- ⇒ 気に入った歌だけ歌詞も意識して聞く。
- ⇒ 歌詞カードを見ながら聞きます。

- ⇒ 知っているフレーズが歌われていないか気をつけている。
- ⇒ この授業を受けてから歌詞に注意するようになった。

02) 洋楽を使用した英語の授業をこの授業以前に受けた経験がありますか。

[ ] はい 18名 [ ] いいえ 31名

- ⇒ 高校の writing の授業の先生が、その日学習する文法項目を含んだ洋楽の曲を授業中にかけていた。
- ⇒ 中学校 3 年生の時、先生がギターを弾きながら洋楽を全員で歌いました。
- ⇒ 中学の英語の授業で
- ⇒ 中学の頃に、リスニングの教材として“Take me Home Country Road”をつかったことがあった。
- ⇒ 高校の授業で留学から帰ってきた先生が使用していた。
- ⇒ 高校の時、ネイティブスピーカー(英国美人)の授業で。
- ⇒ 中学の時ごくまれに
- ⇒ 中学校時代に、洋楽の穴埋めと洋画のリスニングをした。
- ⇒ 高校の writing で、ビートルズをよく聴いた。
- ⇒ でも、とても少ない。その時そんな授業があったらとてもたのしかった
- ⇒ 中学の時に、洋楽を使うのが好きな先生がいて、マライア・キャリーや「ラスト・クリスマス」を聴いて歌いました。
- ⇒ 高校でたまたま洋楽を使用しました。
- ⇒ 中学の時何度かあった。
- ⇒ 中学・高校の授業でも英語の曲を聞き、プリントの穴埋めをやった。
- ⇒ 高校の時の英語の先生が毎週していました。
- ⇒ 中学と高校の時に何度か。
- ⇒ 中 2、3 の時の英語の先生が「リズムやねん」と言っていました。

03) 洋楽を使用したこの授業の受講以来、英語学習に対する考え方や気持ちに変化が起きたか。

[ ] はい 35名 [ ] いいえ 14名

- ⇒ 普段洋楽を聞くとときも、歌詞をできるだけ聞きたらと思うようになった。
- ⇒ 気軽に英語との接触ができ、曲も良い曲があって英語に興味がある。
- ⇒ 洋楽だと、楽しみながら英語に触れられる。
- ⇒ 洋楽をただ聴き流すだけでなく歌詞を聞きとろうとするようになりました。
- ⇒ あまり勉強という気がしなくなった。
- ⇒ 大学に入ってから、この授業と部活の影響で最近は洋楽を毎日聴いています。
- ⇒ リスニングの曲が楽しみになった。
- ⇒ もっとちゃんとした英語らしい発音を身に付けたいと思うようになりました。
- ⇒ 自分でも洋楽を取り入れるようになりました。
- ⇒ リスニングの重要性に改めて気付いた。
- ⇒ 英語が身近なものに感じられるので大変良いと思います。
- ⇒ 英語に積極的に触れるようになりました。
- ⇒ 英語が身近に感じられるようになった。
- ⇒ 特に授業が契機になっていない。
- ⇒ 英語の学習が以前よりすごく楽しくなった。
- ⇒ ふだん、家にいるときも洋楽を聞くようになり、聞き取れるようになってきた。
- ⇒ 英語の歌をよく聴くようになった。
- ⇒ 英語は喋る言葉なのだと思うようになった。

- ⇒ 日常会話に使う語を学ぶ意欲が増した。
- ⇒ 英語の授業が楽しくなった。
- ⇒ 面白くて興味が引き出される。
- ⇒ 洋楽が前より好きになった。
- ⇒ 聞き取りづらい単語も注意して聞くのでいい。
- ⇒ 面倒だなあという気持ちが減った。むしろ楽しんでいる。
- ⇒ だんだん英語の興味を持つようになりました。
- ⇒ I found my weak points in English.
- ⇒ 今までは、無意識に聞いていた曲も言葉に注目するようになった。
- ⇒ 洋楽の歌詞の意味を知ることができて、洋楽に興味を持てるようになった。
- ⇒ もともと洋楽が好きなので80年代の音楽が聞けたりして楽しかったです。
- ⇒ 楽しく学ぶことができると感じた。
- ⇒ 英語の授業が楽しくなった。
- ⇒ 変わりました。
- ⇒ 英語の勉強は、文法とかばかりでかたくなに思っていたが、少し楽しく感じるようになった。
- ⇒ 文法とかだけやるだけでは、英語は身につかないと思った。
- ⇒ 聞き取りが少し楽しくなった。

04) カラオケやその他の場面(鼻歌含む)においてこの授業で扱った曲を歌う機会がありましたか。

[ ] はい 20名 [ ] いいえ 29名

- ⇒ カラオケで歌った。
- ⇒ “Take Me Home Country Road” は日本語訳と共に好きです。
- ⇒ カラオケに行って、1人1曲洋楽の曲を歌うことになり、“Yesterday Once More” を歌った。
- ⇒ 部屋で何となく口ずさみました。
- ⇒ 元々洋楽を聞く方なので。
- ⇒ 借りたCDによく授業でやった曲が入っているので、私の場合は鼻歌が多いです。
- ⇒ バイト先で“Yesterday Once More” を歌った。
- ⇒ 鼻歌。
- ⇒ 鼻歌で時々歌います。
- ⇒ “In the Navy” を歌いました。
- ⇒ 自分で編集しようかと思った。
- ⇒ 友達とカラオケに行ったら英語の歌を必ず1曲は歌うようになりました。
- ⇒ カラオケで“Take Me Home Country Road” を歌って気持ちよかった。
- ⇒ 以前より聞くようになった。
- ⇒ 部屋で音楽をかけて歌った。
- ⇒ この授業で初めて聞いて好きになったグループもあります。
- ⇒ 鼻歌、スタンド・バイ・ミーなど。
- ⇒ カーペンターズの曲が好きなのでたまに歌う。
- ⇒ “Tears in Heaven” “My Heart Will Go On” とか。
- ⇒ カラオケでたまに歌う。
- ⇒ 鼻歌でペットショップボーイズを歌いまくっている。
- ⇒ “Take Me Home Country Road” “My Heart Will Go On” など。
- ⇒ “Take Me Home Country Road” はとても好きになりました。
- ⇒ 家で一人で口ずさんだりした。
- ⇒ カラオケに行った時、必ず歌っています。

- ⇒ 今はカラオケですごい扱った曲を歌いたい。
- ⇒ なんとなく頭に浮かんで歌っていました。
- ⇒ 歌を聞いた日は、その日1日中頭から離れなくなります。
- ⇒ 友人と“My Hear Will Go On”を歌った。

05) これまで使用してきた洋楽の選曲について何か言いたいことがありますか。

[ ] はい 23名 [ ] いいえ 26名

- ⇒ 買い物しているときに流れているものが多く感じました。うれしく感じました。
- ⇒ バラード調が多いので好ましい。あとどこかで聞いた曲なのが嬉しい。
- ⇒ 有名な曲ばかりだったので楽しく学習できました。
- ⇒ 難しそうだけどロック系もやってほしいです。
- ⇒ 歌いやすいのが多くて良かったです。
- ⇒ とても良い曲ばかりで嬉しいです。
- ⇒ とてもよい曲ばかりだと思います。
- ⇒ 少し洋楽に興味をもった。
- ⇒ どれも一度聞いたことがある歌なので、わかりやすい。
- ⇒ 素晴らしいと思います。
- ⇒ 常に最新の今流行の曲を取り入れてほしい。そうすれば生徒もよりいっそう授業に惹き付けられる。
- ⇒ 自分では聞かない曲目なのでよいと思う。
- ⇒ 昔の曲が多いので、今流行っている曲についてもやって欲しい。
- ⇒ とても素晴らしい。
- ⇒ いろんな曲が聞けて楽しい。
- ⇒ They were interesting.
- ⇒ すごい良い選曲だと思う。欲を言えば現代の洋楽も取り入れてほしいと思う。
- ⇒ 聞くのは90年代、2000年からの洋楽がほとんどですが、昔の方は声は聞き取りやすいと思います。
- ⇒ メジャーな曲が多くていいと思う。
- ⇒ 14 Krat Soul や Boys II Men の曲も入れてほしい。
- ⇒ とても良い。
- ⇒ そのまま続けてください。
- ⇒ うれしいです。

06) 空欄穴埋め、語彙選択、解説、合唱という一連の進行方法について何か言いたいことがありますか。

[ ] はい 17名 [ ] いいえ 32名

- ⇒ 楽しかったです。合唱で発音できるのが良いです。
- ⇒ 聞き取り能力が良くなる。
- ⇒ 解答が早くて見逃すことがある。
- ⇒ 1つの授業で2曲入れて欲しい。
- ⇒ 合唱よりも普通に読む方がいいと思う。
- ⇒ もっとうたいたい。
- ⇒ 合唱について初めて聞く曲は歌いづらいと思った。
- ⇒ 面白くて、いい教育法だと思います。
- ⇒ もう慣れたのでないと変な感じがします。
- ⇒ 色々な英語を学べて良いと思う。
- ⇒ もっとたくさん歌いたいです。発表などあったらおもしろい。

⇒ キーは人によって違うのでいつもつらいです。

07) 洋楽を使用した授業は英語学習や習得に役立つと思いますか(感じますか)。

[ ] はい 40名 [ ] いいえ 9名

- ⇒ 楽しく学べて良いと思う。
- ⇒ 誰でも楽しみながら勉強できるので役に立つと思う。
- ⇒ しないよりずっといいと思いますが。
- ⇒ リスニング能力もつくし、歌うことは楽しい。
- ⇒ 楽しく英語に触れることができるので良いと思います。
- ⇒ 頭に残りやすいと思う。
- ⇒ 少しは役立つと思います。
- ⇒ 楽しく身につくと思います。
- ⇒ 英語がさらに楽しくなりました。意欲が湧きます。
- ⇒ 洋楽を聞いて学習すると、英語がすごく楽しく感じる。歌で覚えた英語の単語や表現は心に残り忘れない。
- ⇒ 個人的にも聞いてみようと思います。
- ⇒ チャンクの勉強になるのでよい。
- ⇒ 楽しいことをしなばら学ぶと効率がいいと思います。
- ⇒ ネイティブは実際に聞いて理解していわけだから、使われているフレーズは十分に参考になると思う。
- ⇒ 英語が楽しくなるから。
- ⇒ とても重要だと思う。
- ⇒ 音楽での英語学習は文章での学習よりも頭に残るし、やっていて楽しいので習得にも役立つと思う。
- ⇒ 英語に対する興味がわく。
- ⇒ 覚えられるから。
- ⇒ 親しみやすくなる。
- ⇒ 楽しんでできるから良いです。
- ⇒ 授業を楽しむことができた。
- ⇒ 歌詞の中でわからない単語を調べることで単語力がアップすると思う。
- ⇒ 授業がおもしろくなった。
- ⇒ 楽しんで英語を学べると思う。
- ⇒ 日常で使う英語も出てくるので役立つ。
- ⇒ 自然と歌詞を覚えられて役立つている。
- ⇒ 発音の勉強に役立つと思う。
- ⇒ It improves my listening.
- ⇒ 歌を英語で覚えてしまえば会話の際や文法を思い出すときにおおいに役立つと思う。
- ⇒ 歌詞から英語特有の表現を学ぶことができるので、役立つと思う。
- ⇒ カルチャー面を知ることはいいいと思います。
- ⇒ 楽しく興味がわいて良いと思う。
- ⇒ 思います。歌だとフレーズも覚えやすい。
- ⇒ 英語が好きになる。
- ⇒ 勉強するときの入り口が広がる。他のテキストに表現が同じものが載っていると、得した気になる。
- ⇒ リスニングや文法などに役立つと思う。とてもいいと思います。
- ⇒ すごくいいと思います。英語の歌詞の意味は何だろうか考えるようになりました。
- ⇒ 普段習わなそうな言い回しを教えてもらえてよい。